

'82年度 第3期

テーマ

# 『冬をいかにむかえ撃つか』

今週は  
越冬の歴史

そのん

# 夜間学校ニュース

＝発行＝  
釜ヶ崎 夜間学校  
西成区萩の茶屋2-8-18  
喜望の家気付  
電話 六四七-三九四六  
(木曜日夜七時～九時)

越冬斗争12年(70年～82年)

## いかに闘い

## いかに冬たか

### 体験者は集まれ!!

### 今夜7時より喜望の家・集会室にて

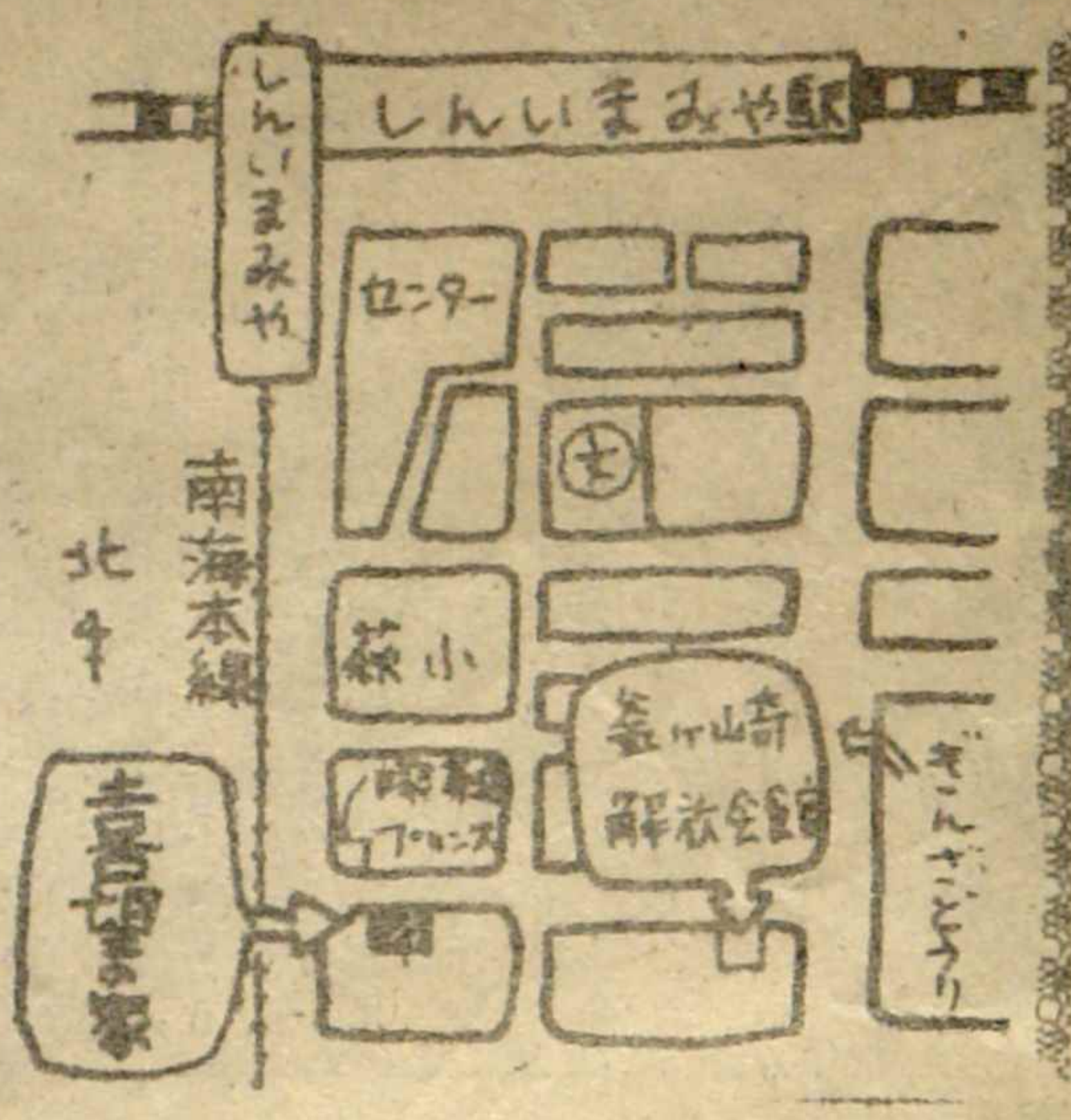
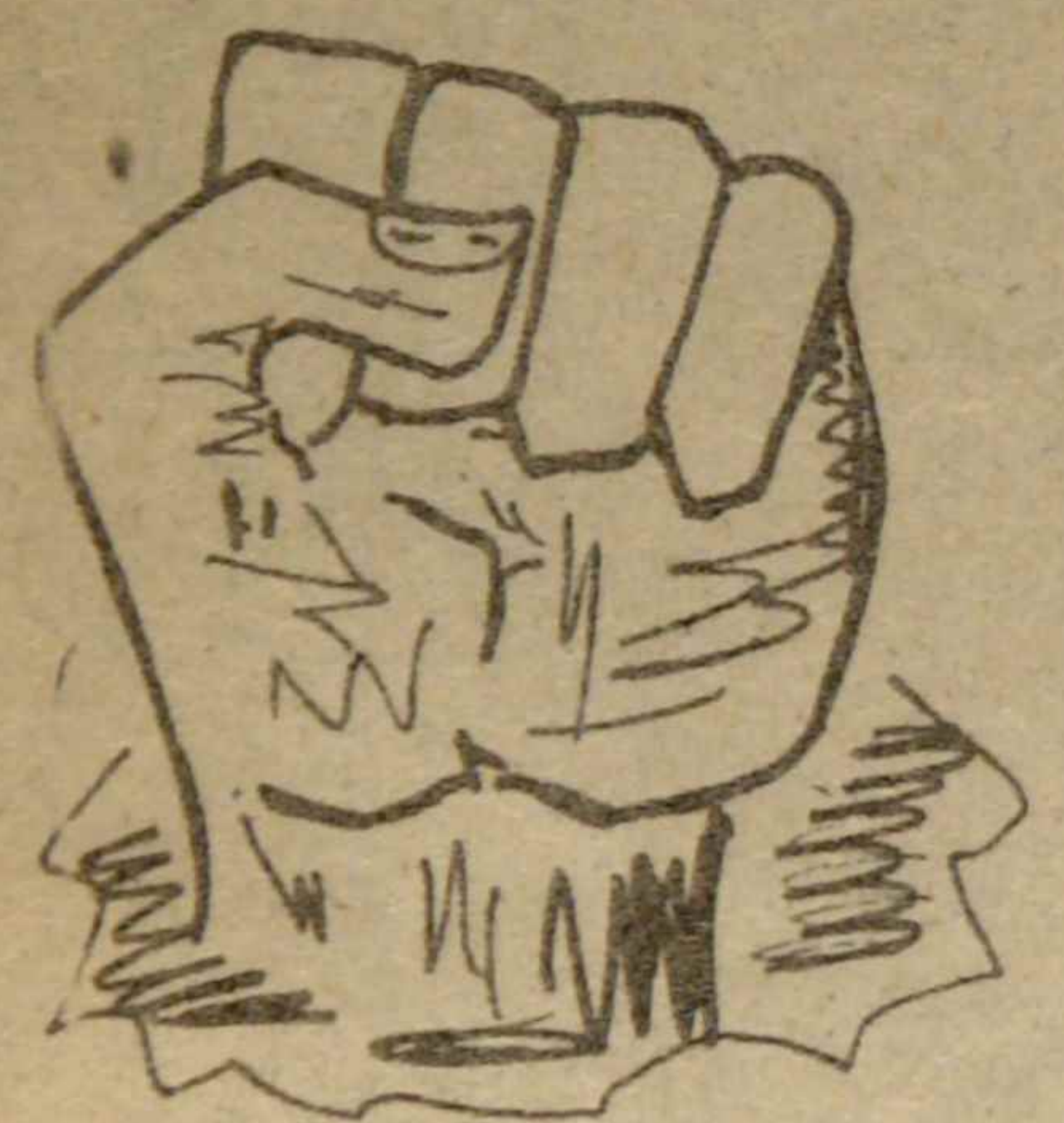
越冬なんか止めちまえ!!  
という声が出てきたりして  
これから厳しい冬を迎える  
にあたって過去二回この夜  
間学校で越冬斗争をやった  
味について話し合ってきた  
した。

このニュースの裏面の報  
告にもあるように、二〇年

前の暴動があった年の冬に  
は、労働者自らが立ち上が  
って三角公園にテントをは  
る事ができたのでした。  
その後は、あまり自立し  
た動きがありませんでした。  
そして一九七〇年(昭和四  
五年)から釜ヶ崎越冬斗争  
として労働者の斗争がうづ

けられてきました。はじ  
めの頃は、十二月五日から  
一月四日までと期間が短  
かったけれども、テン  
ト村をつくって連帯のあ  
る斗争でもり上っていま  
した。医療での支援もあ  
り多くの仲間が結集して  
いました。意気の上がる  
越冬の後は、もりもり働  
きに行っていたものでし  
た。

ところが七五年二月に  
花園公園のテント村が官  
権によりつぶされて以来  
共同の拠点をもちつことが  
できず、仏現寺公園も用



意気がうるわれてきました。  
こうしたなかで、今年と冬  
を迎えることになりました。  
「釜で一冬越せば一人前」と  
いわれたようにわれわれにと  
って釜で生きることと冬とは  
厳しさの中の厳しさです。今  
年の冬をどうするかを、過去  
十二年間の越冬斗争の歩みを  
ふりかえって考えてみたいと  
思います。体験をみなさんと  
ちよつてくださ。待つてます。

前回の報告・第三期第六回

『オレ達にも』

テーマ・昔はこのように斗ってきた……  
正目とする権利がある。』

一九六二年大晦日午後一〇時近く、「オレ達を留置場に入れる。オレ達はまじめな労働者だ。寒空に空腹かかえて、なぜ青カンしなけりばなう労働者の宿泊をセンターが依頼した。同キャンプは、ないんだ」と、西成署前で約七〇名の労働者が訴えた。Bさんは語る。西成労働福祉センターと京橋と信太山にあって、西成署は緊急会議を開き、二三の簡易宿泊所に、六四宿泊人員一八七名、名を合宿させることを決めた。同夜の様子をこのうち西成地区からセンターの事業報告書は伝えている。

(一九六二年)

この前年、越冬用のテント三棟を大阪府金ヶ崎分会

日本自由労働組合が出させ、一晩で約一〇〇名がそれを三角公園で利用していた。ところが、金ヶ崎分会の解散のために、翌年には、テントが宿に浮いてしました。今は倉庫の中。オレ達の結束が弱まれば、すぐに行政はオレ達の生活を締めつけにかかると。これは、今も昔も変わらぬ。

『平ぜいから貯金をしてあげ。』

当時の役人もよくいったそうです。何故、貯金ができなかりか。そこに問題があるのに。

一九六三年末には、救世軍キャンプに金ヶ崎の労働者の宿泊をセンターが依頼した。同キャンプは、

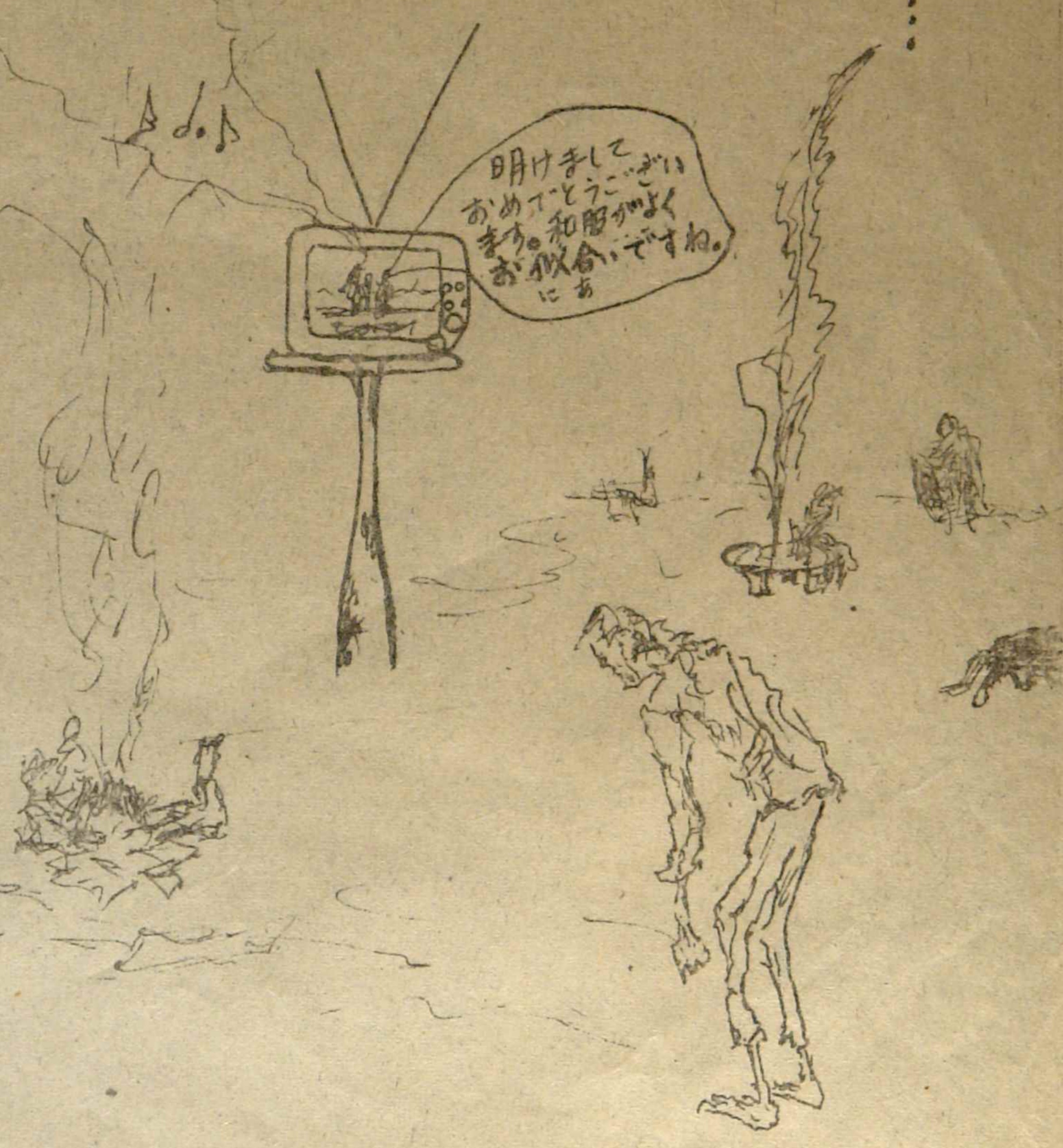
行、たものは、七一六名と推定されている。

一九六二年から一九六九年まで、年末の「金」という制度があった。

一〇〇〇円で、一人当り三口まで、毎日あ、たとDさんは話す。また、一九六四年には、失対のセンターに貯金し、センターはこれに五〇%の奨励金をつけて、年末三〇日に団結して、斗って、引き上げた。Bさんが教えてくれた。払い渡す方式をとったものであった。たとえば、三〇日まで、積立金が、一〇〇〇円になってければ、一五〇〇円Mさんは言う。何もしなかつたら、我々の生きるとは、七万六〇円にのぼった。なお、当時の現金単価は、八〇〇円から一一〇〇円で

(積立金の一倍半)渡された。一九六二年には一〇六名が入金し、積立貯金

明けましておめでとう。和服が似合いですね。



権利は、奪々奪りあがる。この冬はアブレをもうえな人が増えるが、おもしろいね。就職申告書がなくなると、テレビと山谷から来た